特集　お袈裟

お袈裟の意義、現状、その将来

駒沢女子大学学長・文博　東　隆眞

一

お袈裟は、仏教徒の衣類のひとつであり、仏教徒としての標幟（ひょうし）であります。

仏教徒の衣類のひとつとか、標幟と言っても、中国、韓国、日本などの、いわゆる北方仏教、大乗仏教においては、出家僧侶も在家信者もお袈裟をまとっていますが、スリランカ、タイ、ミャンマー（ビルマ）、カンボジア、ラオスなどのいわゆる南方仏教、上座部仏教では、在家信者がお袈裟を身につけるなどということはしないようです。チベット仏教においても、お袈裟は、お坊さんだけが被着しているようです。いつから、どうして、このようなちがいが生まれたのでしょうか。

また、お袈裟は、だいたいスカーフのような大風呂敷きのような、大きな一枚の長方形の布になっている点では、北方仏教でも南方仏教で

も共通しています。しかし、その材料、形状、色彩、大きさ、作り方、とりあつかい方などについてこまかくしらべてみると、むかしから、いろいろとちがいがあるようです。どうして、このようになってしまっているのでしょうか。

わが国の仏教の歴史を考える場合、飛鳥時代、六世紀から七世紀にかけて登場した聖徳太子（五七四～六二二）の存在を抜きにすることは出来ません。

聖徳太子は、親鸞聖人（一一七二～一二六二）によって、「和国の教主聖徳皇」と口をきわめて稱揚されましたが、太子は、在家信者であって出家僧侶ではありません。この在家信者聖徳太子は、お袈裟をかけて『法華経』や『勝曼経』を講説したので、天から宝華が降る奇端が生じたと伝えられます。

お袈裟を被着したという点を重要視して、鎌倉時代の道元禅師（一二〇〇～一二五三）は、聖徳太子を、「人天の導師」とか、「仏の使い」とか、「衆生の父母」であるとか、『正法眼蔵』（「袈裟功徳」の巻）で、賛仰しているのであります。

二

道元禅師は、『正法眼蔵』（「袈裟功徳」の巻）で、「在家の人天なれども、袈裟を受持することは、大乗最極の秘訣なり」と述べています。在家信者がお袈裟を受持することは、大乗仏教のもっともすぐれたところだといわれるのであります。

日本の仏教で、仏教徒にとってお袈裟が如何に重要であるかについて強調したお坊さんは、けっして数は多くはありません。だれがお袈裟についてどのような考え方を抱いたか、どのようなことをしたか、いまは余裕がないので、べつの機会にとりあげましょう。

ここでは、私は、道元禅師についてみたいのです。道元禅師は、日本仏教で、お袈裟について本格的にとりくんだ数少ないお坊さんの一人であります。道元禅師は、その代表的著作『正法眼蔵』のなかで、「袈裟功徳」の巻と、「伝衣」の巻とを書き残していらっしゃいます。

題名に沿って申しますと、「袈裟功徳」の巻は、お袈裟にそなわっている徳性（功徳）を書いたものであり、「伝衣」の巻は、お袈裟の伝統、継承について示してあるとしなければなりません。しかし、その内容を見ると、この両巻の内容はほとんど似ています。

「袈裟功徳」の巻には、正しいお袈裟の伝統は、インドの達磨大師から中国にもたらされたものであること、お袈裟の意義、お袈裟の歴史、お袈裟のかけ方、お袈裟の材料、洗い方、管理方法、作り方、種類などなど、くわしく述べてあります。「伝衣」の巻も、だいたいこのような内容になっています。

さて、また、道元禅師は、「おほよそ袈裟は、仏弟子の標幟なり」と言っています。具体的には、五条衣（仕事、労働、旅行などのときに着る。自分の部屋にいるとき着る）、七条衣（修行をするときに着る）、九条衣（人びとを教化するときに着る）などの三種類のころもを指し、三衣といいます。又、標幟というのは、単なる標識ではない、単なる衣類ではない、「毎日に頂戴したてまつるべし」とありますから、合掌して、お袈裟を頭のうえでいただくのである。なぜか。お袈裟は、仏教徒にとって、「仏身なり、仏心なり」とあるように、お釈迦さまのおからだであり、おこころであるからです。お釈迦さまは、お袈裟なのであり、お袈裟はお釈迦さまであります。そういう意味での標幟なのです。ですから、「諸仏の恭敬帰依しますところなり」。もろもろの仏たちが、うやまい信じてきたのです。

「しかあれば、すなわち、袈裟を受持せんは、宿善をよろこぶべし」。

まさに、お袈裟は、解脱出来る功徳をそなえている。ですから、「ふるくより解脱服と称す。業障、煩悩障、報障みな解脱すべきなり」。お袈裟は苦しみ悩みから解脱する衣服であります。業障（やがて地獄に落ちる悪い行為が障りとなる）、煩悩障（むさぼり、いかり、ぐちなどのまよいが絶えずあらわれて障りとなる）、報障（苦しみの報いを受けることが障りとなる）の三つの障りなどは、みな解脱する事が出来るといわれます。

しかしながら、「もし袈裟を受持せんは、仏祖正伝を伝受すべし」。歴代の仏祖が正しく伝えてきたお袈裟を正しく受持しなければならない。ということは、この当時、道元禅師の立場からすると、まちがったお袈裟もあるから注意しなさいということです。中国においては、達磨大師（一五三〇？）から伝えられたお袈裟が正統である。仏陀跋陀羅尊者、肇法師（三八四～四一四）、法融禅師（五九四～六五七）、あるいはインドや中国の経師、論師には、正しいお袈裟は伝わっていないという。道元禅師にとっては、お袈裟が正しく伝わるということは、仏祖単伝の正法が正しく伝わるということにほかならないのであります。

道元禅師は、後漢の明帝の永平年間（五八～七五）に、はじめて中国に仏教が伝来されてよりこのかた、多くの名僧知識がインドと中国をしげく往来しましたが、これらの人びとは、ただ、経、律、論の三蔵（一切経。大蔵経）を皮相的に論議しているばかりで、仏法の真髄を学んでいたのではなかったと批判します。そうして、これらの人びとは、お袈裟をただ単に衣服とのみうけとめて誤った理解をしている、すなわち「これらのたぐいは、ひとへに衣服とのみ認じ

て、仏法の尊重なりとしらず、まことにあはれむべし」としています。まことに激越なことばが並んでいますが、道元禅師にとって、お袈裟は、衣生活とか衣文化の一つというレベルではなく、実に信仰生活そのものであるといった方がよいのでしょう。

これらの文章のなかに、道元禅師の、お袈裟に対する、あるいはお釈迦さまに対する、そして仏法に対する熱い想いを読みとることが出来ます。

このような道元禅師を高祖としていただく日本の曹洞宗でありますから、たとえば後代の江戸期には、面山瑞方禅師（一六八三～一七六九。『釈氏法衣訓』の著者）、逆水洞流禅師（一六八七～一七六六。『伝衣象鼻章稿』の著者）、黙室良要禅師（一七七五～一八三三。『法服格正』の著者）、祖光来禅禅師（一七九五～?。『福田帯邃』の著者）ら、お袈裟に格別の関心を寄せる宗侶が陸続と登場します。そして、その影響は現在まで続いているのであります。

三

道元禅師にはじまっておよそ八〇〇年になんなんとする曹洞宗の歴史のなかで、道元禅師のお説きになったお袈裟の伝承は、道元禅師以後、いったいどのようになっているのでしょうか。この問題については、近年公けにされた久馬慧忠老師著『袈裟の研究』（大法輪閣刊）、川口高風教授著『法服格正の研究』（第一書房刊）、同教授著『曹洞宗の袈裟の知識』（曹洞宗宗務庁刊）、水野弥穂子先生著『道元禅師のお袈裟』（柏樹社刊）、関口道潤老師著『日本曹洞宗初期教団における法衣の研究』（恵林寺刊）など、すぐれた成果をぜひごらんいただきたい。

さて、私は、お袈裟に関して強い関心を抱きながら一向にその方面にくわしくない者であり

ますが、いま、右の研究書、解説書そのほかを拝読して、いまさらながらにおどろくことがあります。

まず、曹洞宗の由緒ある古刹に道元禅師のお手縫いのお袈裟とかご被着のお袈裟ということで伝来しているものは、「袈裟功徳」の巻を基準にして考えるとどうも疑わしいらしいということであります。これには本当におどろきます。しかもまた、その道元禅師のお袈裟なるものが二五条衣であるそうです。この点も、少しひっかかります。というのは、「伝衣」の巻には、「嫡嫡正伝」のお袈裟の種類として、九条衣のほかに、十一条衣、十三条衣、十五条衣、十七条衣、十九条衣、二十一条衣、二十三条衣、二十五条衣、三百五十条衣、八万四千条衣など、まだそのほかにも諸種の大衣があるとされてはありますが、「袈裟功徳」の巻には、「袈裟、言レ有二三衣一。五条衣、七条衣、九条衣等大衣也。上行之流（トモガラ）、唯受二此三衣一、不レ蓄二余衣一、唯用二三衣一供身事足レリ」。要するに、すぐれた人は、五条衣、七条衣、九条衣など三種の袈裟を受持するだけで、そのほかのお袈裟は蓄えないとあるからです。

また、今日、「袈裟功徳」や「伝衣」の巻のお示しに忠実に従って縫製したお袈裟を如法衣（によほうえ）とよんでいるのを、私は耳にしています。しかし、この如法衣なるものが、沢木興道老師（一八八〇～一九六六）の系統と橋本恵光老師（一八九〇～一九六五）の系統と、そのほかの系統とでは、若干のくいちがいがあるように見うけられます。おそらく、それは、「袈裟功徳」「伝衣」の両巻に書いてあるお袈裟の作り方に関する文章の解読の相違から生じた結果でありましょう。関係方面におかれては、一堂に会して、相互の研究と相互の理解と今後の方策を講じてはどうでしょうか。

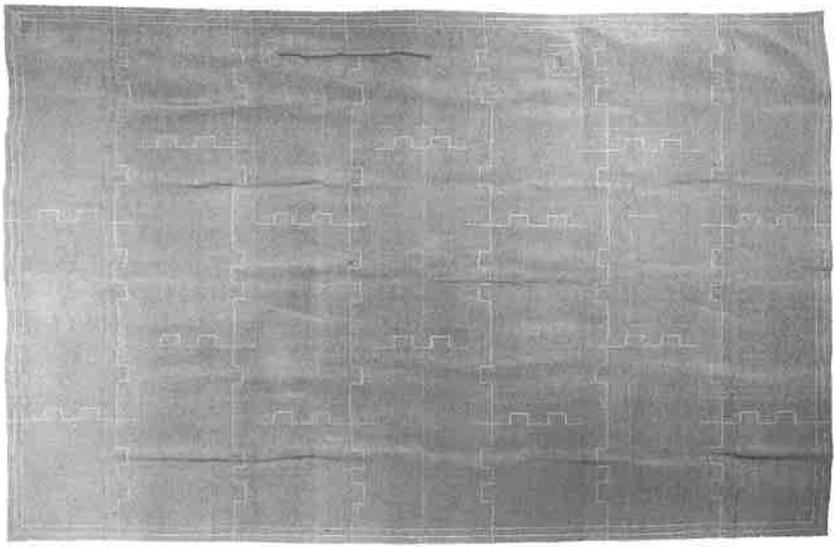
なお、今日、多くの曹洞宗の僧侶は、もちろん私もふくめて、だいたい法衣店で購求した普通の七条衣や絡子（五条衣を縮小したかたちのもの。胸にかけるようにした）などを着用しています。いわゆる如法衣を着用していない方が圧倒的に多い。

しかも、永平寺で修行した人と総持寺で修行した人と、いわゆる如法衣をかけている人とでは、それぞれ搭け方に多少のちがいが見られるのは周知のとおりです。しかし、こういうことも、他宗他派の人には理解しにくいところではないでしょうか。

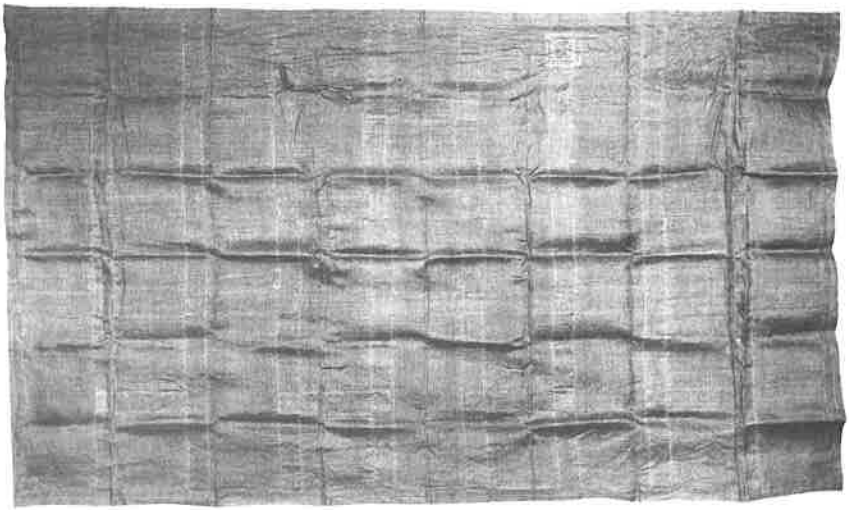
前後しますが、更につけ加えておきましょう。

さきにもご紹介したように、道元禅師は、在家信者がお袈裟を搭けることを奨励しておられます。しかし、道元禅師以後およそ七五〇年の曹洞宗の歴史のなかで、お袈裟はほとんどことごとく僧侶のものであって檀信徒のものではありません。道元禅師の「袈裟功徳」や「伝衣」の両巻のお示しにしたがって、檀信徒の方々が、絡子や半袈裟はともかくとして、五条衣や七条衣などのお袈裟を着てお寺の行事に参加したというはなしは寡聞にして耳にしたことがありません。もっとも「袈裟功徳」、「伝衣」の両巻の教えにしたがって、お袈裟を縫うのは男性の僧侶にも見られないではありませんが、それは在家信者や尼僧さんに多いようです。それも曹洞宗の一部に見られる特別な現象であって、けっして一般化してはいないと私は理解しています。

なお、誤解をおそれずにあえて申します。道元禅師の「袈裟功徳」、「伝衣」の両巻の教えにもとづく如法衣を尊重するのあまり、一部の者のなかには、如法衣にさほど関心がない者、如法衣を所持せずあるいは着用しない者に対して、彼らを内心軽視し蔑視する風潮が見られることです。それほどでなくとも、如法衣を着ている



七條割截　開葉・馬歯



九條割截　刺葉・松馬色

自分にある種の優越感を抱くことがあるようです。また、他宗他派のお袈裟を粗末に扱うなどという状況に出くわすことがある。

道元禅師のお袈裟尊重主義を高揚するのは大いにけっこうなことですが、だからと言って如法衣以外のお袈裟を無闇に誹謗するとしたら、それは傲慢というものです。

くりかえして申しますが、あとで触れることですが、道元禅師の所説にとらわれてしまって、他の伝承たとえば南方仏教、上座部仏教に伝わるお袈裟を邪道だときめつけて軽蔑するようなことがあってもならないと考えます。道元禅師の教えも尊く正しいし、スリランカやタイの仏教の教えもまた尊く正しいとうけとめるところに、今日の仏教の歩む道があると考えます。

ところで、余計なことですが、私もわずかに数領のお袈裟を護持しています。それらはいずれも尊い因縁によって私のところにただいまおさまっている普通のお袈裟、法衣店がつくったお袈裟であります。そのなかで、あえて、印象の深いお袈裟といえば、阿波の城満寺で渡辺頼応老漢（一八九〇～一九八九）に就いて得度を許されたときにいただいた黒色の紬のお袈裟、それから師翁渡辺玄宗禅師（一八六九～一九六三）の遺品の羽二重の白衣でつくった茶色の七条衣、一九七八年(昭和五三年)、大本山永平寺に講師として招へいされたときいただいた謝誼でつくった麻地の草木染めの七条衣の三領（三肩）です。今の私には、いうところの如法衣を被着するご縁が成就していませんが、右の三領の七条衣は、私にとっての尊い尊い仏衣なのであります。

四

このあたりで、曹洞宗以外の他宗に目を向けてみましょう。

さきほどの如法衣ということばですが、関口老師は、如法衣とは、「江戸時代中期における日本仏教各宗の袈裟研究家によって主張し、著用されたものであり、インドの釈尊依用のもの、仏教教団共通のものと信じられた袈裟」としておられます。

ここでいわれている如法衣というのは、前項で私が如法衣といっているのとはちょっとちがうのですが、それはそれとして、右の関口師の文章で思い出したのは浄土宗のお袈裟であります。たしか浄土宗のお方から如法衣ということばを聞いたことがあります。ただし、浄土宗の如法衣なるものの実際をこの目で確認したわけではありませんので、いずれその機をえたいと願っています。

私は、かつて高野山真言宗の金山穆照大僧正（高野山大学学長。高野山真言宗管長）が高野山で平生用いておられた麻地の木蘭色の七条衣を手にしたことがありますが、この七条衣は私がいうところの曹洞宗の如法衣に酷似していました。このあたりの関係はどうなっているのでしょうか。

また、これは伝聞の域を出ませんが、浄土真宗（真宗）の僧侶の被着するお袈裟は正統なお袈裟ではない。天台宗などのお袈裟とは似て非なるものだといいます。浄土真宗（真宗）の僧は、非僧非俗というか半僧半俗というか、とにかく出家僧侶ではないのがその理由だとかいうのですが、ほんとうはどうなっているのでしょうか。

日本仏教の各宗が、一堂に会して、お袈裟の研修会を開くことがあってもよいようにおもいます。

浄土真宗（真宗）がいわゆる在家教団であるのかどうかはさておいて、在家教団と呼ばれている仏教の新宗教の一つに、孝道教団（横浜市）

があります。先日、孝道教団のお招きをうけてお釈迦さまのお誕生をお祝いする「花まつり」の式典に参上いたしました。そして、そのスケールの大きい見事な祭典に圧倒されました。おそらく日本一の「花まつり」と評してよいでしょう。

そこでは、有髪の信者さんたちが、男性も女性も茶色のお袈裟を洋服のうえにまとって行事に参加しておられました。私は、意外な場所で、道元禅師のお示し、すなわち「在家の人天なれども、袈裟を受持することは、大乘最極の秘訣なり」と在家信者がお袈裟をかけることを強調されていますが、これが実現されているのを拝見した思いでした。現代の日本仏教において、この孝道教団のような例は、まだほかにもあるでしょう。

五

さらに海外の仏教に視点を転じてみましょう。

平成三年の夏、私は、韓国の通度寺に拝登いたしました。通度寺は韓国仏教を代表する大寺院の一つです。理事長黒田武志老師の横浜善光寺留学僧育英会が、通度寺のよびかけに応じて、同寺に、金襴九条衣一肩、金襴安陀会一肩、麻九条衣一肩、麻安陀会一肩、そして道元禅師の『正法眼蔵』九五巻（大本山永平寺蔵版。和装本）を贈呈するのに同会理事として同行したのでした。これは、一千数百年間にわたる日韓両国の仏教史上最初の出来事ではなかったでしょうか。このことの関係記事は「成寿」第18巻（一九九三年春季号）に出ていますから、詳細は省略しますが、そもそも黒田老師は、篤信者の縫製した糞掃衣（掃き捨てられた衣類でつづったお袈裟で、最も功徳があるとされる）などを大

本山永平寺の丹羽廉芳禅師（一九〇五―一九九三）はじめ有縁のかたがたに人知れず捧呈されてきた奇特なお方です。

さて、通度寺には、韓国の国宝に指定されている「釈迦如来袈裟」が秘蔵されています。また、通度寺には、世界各地のお袈裟を一堂に集めて、これを展示し、お袈裟のこころを結んで世界の仏教徒が交流し、協力して、生きとし生けるものの平安と浄福をすすめていきたいという大きな誓願があって、これに黒田老師が一も二もなくこたえたわけでした。

私は、その翌年も、黒田老師と再び訪韓して、松広寺に拝登し、ソウル特別市の祇園精舎の住持雪峰老師（尼僧）にたいそうお世話になりました。雪峰老師は、私どもに、僧伽梨（大衣のこと）二長一短九条というお袈裟を二領も恵与して下さったのであります。

また、私は、横浜善光寺留学僧育英会の育英生志願者の現地面接と事業推進のために、平成四年（一九九二）に台湾とタイに出かけました。

台北市の龍山寺というもっとも古い有名な寺院に詣でますと、それは朝の八時すぎでしたか、香煙が立ちのぼり善男善女でにぎわう光景の凄さにはびっくりもし感動もいたしました。二、三百人の女性たちが黒い服のうえにお袈裟を着て、となえごとをしながら境内を遶行しているのです。その後、私は、香港やシンガポールに出かけて、華人社会の仏教寺院や施設を調査しました。そこでも台湾の龍山寺と同じように、在家信者がお袈裟をかけて各種の儀礼に参加しているのを確認いたしました。

タイのバンコク郊外のワット・パクナムは、数百人の僧たちが起居している瞑想修行で有名な大寺院ですが、お袈裟を身にまとうているのは出家の比丘にかぎります。在家の信者は着用していません。信者が修行僧に供養するために、

境内の売店で托鉢用の用具などとともにお袈裟を頒布しています。私は、この店で何がしかの供養をさせていただいて、タイ僧のお袈裟一式を日本に持ちかえったことでした。

ワット・パクナムの僧院の修行僧の個室に案内されて入ってみますと、洗濯したお袈裟が部屋の中央にわたした細い紐に掛けてありました。

アユタヤの古刹ワット・ヤイチャイモンコンの僧院では、洗濯したお袈裟が立木の小枝に掛けて乾かしてあり、それが微風になびいている光景に出会いました。それは、いまも私の脳裏に強く灼きついています。道元禅師がこの光景をご覧になったとしたらどのようにお感じになったでしょう。この僧院の僧にとって、お袈裟はまさに衣類の一種であり、その衣類を洗って干すことは、日常生活の一齣なのでありましょう。ここには、僧の平常の生活そのものがあります。生活そのものとなっているお袈裟のすがたがあると感じました。日本仏教のお袈裟は、主として儀式、儀礼のときに着用されることが多い。

お隣りのミャンマー（ビルマ）についてはどうかと思い、生野善応先生の『ビルマ仏教―その実態と修行』（大蔵出版刊）を拝見しますと、得度のとき師僧から授与される三衣のこと、坐具のこと、被着のこころえ、お袈裟の功徳などがくわしく紹介してあります。しかし、在家信者が出家僧侶のお袈裟を着るなどということは書いてありません。

話はいささか飛躍するかも知れませんが、スリランカ、タイ、ミャンマーなどの女性のサリーに似た服装を見ると、左肩の上に長方形の布をかけ前後に垂らしています。仏像や僧侶が左肩にかけているお袈裟に類似しているかに見受けられます。私は、日本の和服はお袈裟の影響がきわめて大きいとかねがね思っているのです

が、ひょっとするとスリランカ女性などの衣装の原型もお袈裟なのではないでしょうか。

六

国際化する現代世界において、仏教も国際的に広がっています。お袈裟もまた、ヨーロッパ、アメリカに広がっています。お袈裟は国際的な視野からとりあげてみなければならない段階に入っています。

一九七八年、私は、ヨーロッパ禅協会を創設した弟子丸泰仙老師（一九一四～一九八二）から、老師のお弟子となったフランス人女性アンヌ・マリー（泰玉照蓮尼、当時二五歳）さんがアルプス山中の夏安居でつくった絡子をいただきました。

また、一九九五年夏、前角博雄老師（一九三一～一九九五）が開いたニューヨーク市の近くのヤンカー市の禅コミュニティで、老師の高弟グラスマン・徹玄老師のお弟子さんのメキシコ人女性が、糞掃衣にヒントをえてつくった布製のバッグをプレゼントしてくれました。

一九九六年三月二八日付の「中外日報」の広告には、京都の井筒法衣店が、お袈裟に関する全四巻のビデオを制作し、販売するとあって、大いに注意を寄せられました。その内容構成を見ると、第一巻「法衣伝来の道」海外に於ける袈裟の着装法〈スリランカ・タイ・ミャンマー・韓国・中国・他〉、第二巻「現代各宗派の法衣」国内における法衣の歴史と現在の法衣〈天台・真言・浄土・真宗・曹洞・臨済・日蓮・各宗派の現状〉、第三巻「正法眼蔵袈裟功徳」曹洞宗正伝の法衣及お袈裟の種類、第四巻「曹洞宗の袈裟信仰」曹洞宗のお袈裟の変遷と縫い方、となっています。仏教の国際化時代にふさわしい時宜をえたこころみと言うべきでしょう。

ひるがえって、お袈裟は仏教徒の標幟であり

ます。くりかえしませんが、道元禅師の『正法眼蔵』「袈裟功徳」、「伝衣」の両巻を拝読すれば、標幟の意味するところがよくわかります。私は、お袈裟の功徳を、海外の人々も理解してほしいと思います。そのための具体的な行動をこれからもつづけていきたいと思います。

ここで飛躍した言い方になるかも知れませんが、重ねてしるしますと、私は、タイのワット・ヤイチャイモンコンの境内で見た立木の小枝に洗って干してあるお袈裟の光景こそ、お袈裟の原点だと思います。「仏祖の家常は、喫茶喫飯のみなり」（『正法眼蔵』）という「平常心是道」の世界につらなる世界です。

とまれ、日本仏教なかんずく曹洞宗において、一部にお袈裟の正統性とか歴史的経緯を厳密に追求する姿勢が強いように見受けられます。この作業も大切です。が、あまりこれにこだわると、後向きの学問に墮してしまって、道元禅師のご趣旨からかえって遠ざかってしまうのではなかろうかと危惧されます。それにお袈裟に対する信仰も意義のあることですが、これが高じて、いうところの如法衣のお袈裟ばかりを神聖視し、絶対視して他宗派の立場を認めないというようなことになってしまってはいけない。二十一世紀への仏教の展望が開けてこないでしょう。このことをくりかえし強調しておかなければならない段階に入ってきているとおもいます。韓国の通度寺さまが企画されているように、世界中のお袈裟を集めて、これを展観し、お袈裟のこころをたがいに確かめあって、世界平和のためにつとめていくということが、たとえば、もっとも肝要なことの一つではないでしょうか。そのような視野に立って、お袈裟のこころを学んでいきたいと、私は、願っています。

（横浜善光寺留学僧育英会理事）